電子心母

—量子は心のふるさと—

代表取締役　吉田　隆

第1話「光の涙」(1)

●'21世紀は光の時代'

と言われるためだろうか、光に思いを寄せることが多くなった。その思いをつれづれに語りたい。

● 8月のある週末

長年家族付き合いのある知人の娘さんがボーカルをつとめる、ロック系バンドのライブがあるというので、JR本八幡駅に隣接するビルの地下会場にその娘さんの母親とわれわれ夫婦共々足を運んだ。

小劇場ほどの狭い空間は、出演者とその友人の若者や家族がまばらに集う雰囲気で、仕事帰りの場違いなオッサンでも音楽に浸ることができた。幕が開くと、サスペンションライトが明滅する中に'Yちゃん'はいた。そして、小柄なからだに似合わない力強い声で歌い始めた。その第一声から母親や家内が流し続けた涙、その涙にはワケがあった。

●Yちゃんは

中学校の剣道部では主将を務める明るく利発な娘だったが、高校に入って'うつ'に陥り、不登校を重ねて中退した。自宅にこもり自傷行為を重ね、救急車の世話になったことも何度かあった。

やがて家を離れるなどで、両親も心労を重ねたに違いない。追い討ちをかけるように、可愛がっていた愛犬や親しかった身内の死にも直面する。そんなさなか、夫婦で自宅を訪ねたことがある。好きで書いているという彼女の絵のセンスに驚いた。その感受性の鋭さと彼女の悩みの深さとはきっとどこかでつながっている。やがて彼女は歌に生きる道を見出す。

愛犬の名を冠した'MOMO'で'大事なものを私はなくした'と悲しみを歌い、'Start!'で'そして君はこれから一人じゃない、さあ勇気を出して'と20才の若者らしく自分の新たな出発を歌う、そんな彼女の幼少からここに至る道を知っているからこその、二人の止め処ない涙でもあった。

明滅するライトは、彼女を包み、パワーを与え、未来に向け背中を押す、小さなライムライトでもあった。

● ところで、映画「ライムライト」は、

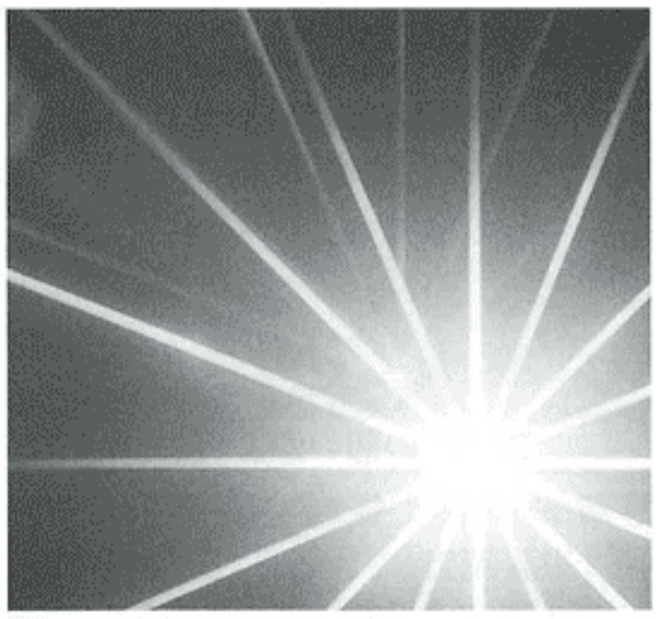
チャップリンにより1952年に製作された、美しいバレリーナと道化の、舞台に散る恋の物語である。

ライムライトのライムは、石灰つまり酸化カルシウムのことである。石灰は熱せられると白熱光を発するため、その前にレンズを置き白熱光を集め、舞台を照らし、おかげで役者たちは脚光(ライムライト)を浴びることができた、とシュワルツ博士は教えてくれる。

つまり、エジソンの登場で電気の力による20世紀の光の時代が到来し、大衆文化が花開く前、'脚光'がまだ舞台で威光を放っていた時代、その19世紀も又、物理化学の力が牽引(けんいん)役となる光の時代だったと言えなくはない。

では21世紀の光は、20世紀の電気の力による光とどこが違うのだろうか?実は、私が演奏会場に足を運び入れるまで、頭の片隅を占めていたのは、21世紀の光といわれる'近接場光'だった。別名'光の涙'と呼ばれる新しい光である。(続く)

(参考引用文献)
1.シュワルツ博士の「化学はこんなに面白い」(主婦の友社、2002年)



電子心母:2年前の夏の夜、皇居のお堀端から見た、無数の蛍光灯の光に包まれ、満月を映し出す、丸の内の高層ビル群の透明な美に魅了され、不意に口をついて出た。ピンク・フロイドのアルバム「原子心母」(1970年)が記憶の底に眠っていたのだろう。

◉編集後記

カナカナカナ、ミンミン蝉から蜩に蝉の鳴き声が変わり秋の到来を感じる。秋の季語、いくつ思い出せるかな。中秋(お団子食べたい!)、彼岸(中日はお休みだ!)、芋の露(里芋大好き!)、自分の好みの言葉しか思い出せない。でも十六夜なんてちょっと物悲しい響きで好きだな。日本古来の言葉には、その裏に深い含蓄がるように私には思える。食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、ところで秋の七草、どれだけ言えるかな。(あしだ)

◉編集部からのお願い

NTSニュースでは読者の皆様からのお便りや投稿をお待ちしております。また、開催予定の勉強会・イベント等、掲載をご希望される方は下記宛までご連絡ください。

〒113-8755　東京都文京区湯島2-16-16　㈱エヌ・ティー・エス「NTSニュース」係
FAX : 03-3814-9152　E-mail : k-kunimoto@nts-book.co.jp

NTSニュース
2006年9月号(通巻91号)
2006年9月7日発行